

CONTENTS

特集／今後の日本語教育施策の推進について

——日本語教育の新たな展開を目指して

巻頭言	日本語教育施策の推進 ——世界規模での課題解決のために——	水谷 修	4
国際シンポジウム	国際化時代の日本語教育支援とネットワーク 當作靖彦/鈴木 妙/徐 一平/李 徳奉/ワワン・ ダナサスマタ/水谷 修/田原昭之/鎌田 徹(司会)		6
論	「コミュニケーション媒介言語としての日本語」の教育	西原鈴子	14
文	高度情報化社会における日本語教育の可能性	加藤清方	16
資料	「今後の日本語教育施策の推進について ——日本語教育の新たな展開を目指して——」 報告書の趣旨、構成・概要		18

連 載

- Cross Road/クロスロード 安西水丸 20
- これからのアートマネジメント@/ソフトの不足? 熊倉純子 24
- ミュージアムNOW@ 茶道資料館 26
- まちづくり最前線① ドラマティック・シティ・サッポロ・プロジェクト 27
- ことばの万華鏡@/期待と信頼にこたえる日本語の普及 水谷 修 30

ACA(Agency for Cultural Affairs)NEWS

- ・平成10年度 芸術選奨決まる31
- ・平成10年度 芸術作品賞決まる36
- ・平成10年度 文化庁優秀映画作品賞決まる37
- ・「九州国立博物館(仮称)基本計画」公表40
- ・東京国立博物館 表慶館から平成館へ——日本考古展示場の移動40
- ・第1号登録美術品、登録される41

イベント案内

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・東京国立近代美術館工芸館
「本野東一の染色——自由への旗印展」/42 ・国立国際美術館「ローズマリー・ラング」/43 ・東京国立近代美術館「横山 操 展」/44 | <ul style="list-style-type: none"> ・新国立劇場 スポットライト/45 ・6月の国立劇場/46 ・芸術文化振興基金ニュース/47 ・表紙解説/編集後記/48 |
|---|---|

Cross Road



— 安西さんはイラストレーションだけでなく、小説やエッセイなど多方面で活躍していらっしゃいますが、絵を描くことと文章を書くことには、どういった違いがあるのでしょうか。

絵を描くことと文章を書くことの両方に共通するのは、

どちらも非常に楽しいということでしょうか。ただ、絵を描くときには基本的には何を考えても自由で、音楽などを聞きながら、こんなものがあつたらいいな、こんな女性がいればいいなと思つたら、すぐに形としてあらわすことができる。描けばその場で見ることもできるわけです。出来上がったときの達成感もありますし。文章だとそうはいかない。書くということは、頭の中にある映像を形にしていくことなので、何か別のことをしながらではできないし、きちんと活字になつてからでないかと客観的に見ることもできない。そういった違いはありますね。

僕は小さい頃から絵を描くことが大好きで、近所の子どもが外で遊んでいるときでも、部屋の中で絵を描いていました。僕の母はそれをとんでも嫌がつて、「絵を描く人だけにはならないで」とよく言っていました。明治生まれの母には、芸術家や絵描きという世の中の規範からはみ出してまわりに迷惑をかける人、というイメージがあつたようです。「スケッチブックなんか持って近所を歩かないで」と言われたこともありですね。だから絵に関してはまったくの独学で、雑誌の挿し絵などを一生懸命に模写したりしていました。

絵を描いていると、体内の血液の温度がちょうど自分にとびつたりと合う感じで、ものすごく心地いいんです。それから絵が出来上がったときの快感——「あ、またこんないいものを書いてしまった」という喜び(笑)。ですから僕は母が何と言おうと、絵を描く仕事をしたいたずつと思っていました。父が早くに亡くなったため家業を継いでいた一五歳年上の兄が、「世の中に絵がうまい人

僕はすごく恵まれていて、
こういう仕事をやってみたいと
思っていると、
必ずそこから声がかかる。
だからいつも断れない(笑)。

あんざい・みずまる / 1942年東京都生まれ。64年日大芸術学部美術学科卒業後、電通に入社。ニューヨークのアゲインスタジオ、平凡社勤務を経て、81年にイラストレーターとして独立。繊細なタッチのイラストレーションが人気で、小説やエッセイなども手がけている。また、幼少時を過ごした千葉県千倉町の南房千倉大橋のタイルに絵を描くなどの多彩な活動でも知られる。著書に『ビッキーとポッキー』(福音館書店)、『アラバドの妹』(平凡社)など多数。

シンプルなイラストレーションを眺めていると、張りつめていた心がずっと和らいで、ほんわかした気持ちに包まれる。安西さんご自身も、いつかどこかで会ったことがあるような懐かしさとやわらかさを秘めた、笑顔の温かい人だった。

安西水丸さん (イラストレーター)

はたくさんいるけれど、こんなに好きなんだつたら、その道に進ませてやってもいいじゃないか」と言ってくれて、その兄に一目置いていた母も、大学で絵の勉強をすることをようやく認めてくれました。

— 安西さんの絵を見ると、心がほんわりと温かくなるような、懐かしさや優しさを感じます。僕のイラストレーションは、ペンをインクにつけて描きます。子どもの頃から自己流です。高校生になつて初めて大学入試のために石膏デッサンを勉強し始めたくらいですから、しっかりと積み重ねて描いていくということは非常に苦手なんです(笑)。

ふだんはあまり意識しませんが、小さい頃からずつと書道をやっていたためか、僕の場合は絵を描くというよりも書を書く感覚に近いのかなという気がしますね。含んだインクがどこでされるかとか、インクが乾かないようなスピード感も無意識のうちに計算しています。サインペンだったら、そんな必要はないわけです。こういった息づかいや手のぬくもり、間合ひみたいなものが絵にあらわれているのかもしれない。また、絵がシンプルなので、こんな調子なら自分でも描いてみたいなと思わせる親近感のようなものもあるのでしょうか。

最近、アトピー性皮膚炎について皮膚科のお医者さんが書いた本を手がけたのですが、これは僕にしてみると初めてのジャンル。ちゃんと描けるだろうかという不安はあつたのですが、僕なりに最善を尽くしました。刊行後しばらくして、著者から僕宛てに手紙が届いたんです。そこには「すてきな絵を描いてくれてどうもありがとう。

とてもいい本に仕上がったので嬉しい」といった内容のほかに、こんなことが書いてありました。

「私は今まで苦しみ悩んでいる人たちのために一生懸命医学を学んで、その知恵を振り絞るようにしてこの本を書いたが、この絵を見てみると、医者がああだこうだと治療するよりも安西さんの絵のほうがよっぽど治療に役立つんじゃないかと思った」。

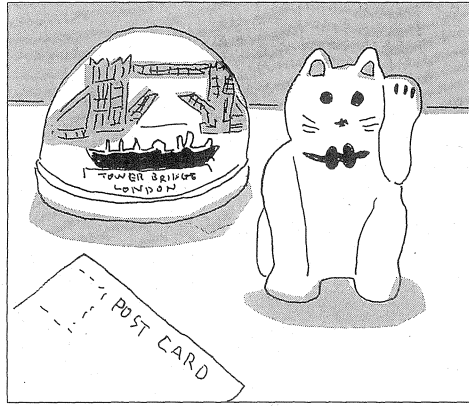
この手紙を読んで、イラストレーションをやっている本当に良かったと心から思いましたね。僕は絵を描くことが本当に好きで、今のように仕事になっても気分的には子どもの頃と何も変わっていません。絵は楽しみながら描かないと、楽しさが出てこないと思うんです。その楽しみながら僕が描いた絵を、みんなが楽しんで見てくれたら、それが一番の幸せですね。

——安西さんは、自ら会長を名のるほどのスノー・ドーム愛好家だと聞いています。その魅力はどういったところでしょうか。

それは、仲間うちで勝手に言っているだけなんです……(笑)。スノー・ドームをご存じでしょうか。手のひらに載るぐらいのガラスでできた半球状のもので、振ると中の風景に雪が降る置き物。日本では最近、さびれた観光地などでしか見かけなくなってしまうけれど、ドイツやオーストリアなどのヨーロッパをはじめ海外では非常にポピュラーなもので、センスのいいものもたくさんあるんです。僕はこれが大好きで、海外に行くとき必ず三、四個は買ってくるし、僕がコレクションしているのを知っている友達からも海外土産にもらったりして、かなり

つくっては手帳に書いていました。また、漢字を習ったばかりの小学生のときも、月・火・水・木・金・土・日と、曜日の漢字をじつと見て、「えらそうな字だな」とか「なんか嫌な感じがする字だな」とか思っていた。

そんな中で、「水」という字そのものがすごく好きだったんです。どこか控えめで、片側が少し崩れているのがはかなげで感じがいいな、と。だからその頃から絵を描いたときには、いつも隅っこに小さく「水」と書いていたし、剣道の防具の胸にさえも「水」と書いていました。だからペンネームに使うならこの字しかないと思って、そうなるかと必然的にその次が「丸」になっちゃった。でもこのペンネームは実際に書いてみると、シンメトリーに近いかたちで字画の少ない



「こんなことをやってみよう」と力まなくても、今、与えられた仕事を一生懸命やっていたら、自然とそういう方向に行くのではないかという気がするんです。大好きな絵を描いて、健康で毎日気持ちよく仕事ができたら、それ以上のことは何も望みませんね。

の数が集まりました。

日本人は機能性を重視して、たとえばこういうたものでも寒暖計になっていたりとかカレンダーになっている実用的なものを好むようです。だからスノー・ドームのような機能のないもの、意味のないものはあまりウケない。でも、この何の役にも立たないような、何でもないとこに僕はとても惹かれるんです。たとえば景色などでも同じで、僕はいわゆる名所や絶景と言われる所よりも、うらぶれて捨てられたような風景や、人に見向きもされないような何気ない風景が好きなんです。人があまり行かないような所を一人でぶらぶら歩くのもいい。また、電車の窓からみる風景なども最高にいいですね。流れる風景を眺めながらいろいろなことを空想するのは、本当に心が躍る楽しいひとときです。

——安西さんのお名前はペンネームだそうですが、とてもユーモラスでありながら、優しい響きですね。由来をお聞きしたいと、ずっと思っていました。

このペンネームを使うことになったきっかけは、平凡社と一緒に風山光三郎さんの一言。僕が絵を描くことを知って、ご自分の文にイラストレーションを描いてほしいと言ってきたんです。その際に「ペンネームをつけると便利だよ。僕と同じ『あ』で始まる名前がいいよ」と。それで考えたのがこの名前。『あ』のつく名字「安西」は、祖母の実家の名字からとりました。

僕は子どもの頃から好きがはつきりしていて、学校へ行く道などでも好きな道と嫌いな道がありました。好きな道ベストテン、好きな樹木ベストテンなんかを勝手にわりにインパクトもあり、なかなか良かったんですよ。風山さんも一言、「いいな」と。

今でも時々思うのですが、あのとき風山さんが僕に声をかけてくれたなかったら、イラストレーターである今の自分はなかったでしょうね。ニューヨークから帰国してフリーでイラストレーションをやっていたころと決意したもの、それは簡単にいかなかった。作品を持って出版社に売り込みに行っても、編集者に一蹴されて傷ついて帰ってくることもあったし、実際にそれに向けて売り込みをやめてしまう若い人も多いんです。

だから僕はフリーになる前に、まずイラストレーションを依頼する側の仕事をしっかり身につけようと出版社に入りました。そこで心がけたのが、イラストレーションの持ち込みはよっぽどひどいものでないかぎり、とにかく一度は使ってみようということ。印刷されたものを持って他の出版社に売り込みに行くと、編集者は安心するわけです。ああ、こんなところでも仕事をしているのかと。編集者してみれば、名の知れたイラストレーターを使えば間違いがないという気持ちなのでしょうが、考えようによっては無名のイラストレーターを発掘し育てることもなるわけです。

日本のイラストレーションの水準は非常に高いし、光る才能を持つ若手もたくさんいます。僕は仕事や人にとっても恵まれて、これまでにたくさんいい出会いがあった。最近では母校でイラストレーションを教えているのですが、若手の才能をピックアップして育てていくのも、これからの僕の役割だと思っています。

(取材・構成／編集係)

Cross Road

佐原市佐原伝統的建造物群保存地区（千葉県）

商家町／平成8年12月10日選定
 (撮影／三沢博昭)

佐原は利根川下流域の物資集散地として、近世に栄えた河港商業都市である。利根川に注ぐ小野川に高瀬船等が行き交うと、川沿いには「だし」と呼ばれる荷揚げ用階段が多数設けられて、米穀等の諸荷物の上げ下ろしが行われた。経済的な繁栄は水運が衰退する昭和前期まで続き、重厚な蔵造の町家や土蔵の町並みが形成された。

佐原市佐原伝統的建造物群保存地区は、面積約7.1haで、千葉県はもとより関東地方で初めて、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。保存地区の伝統的建造物群が多様性に富んでおり、特色ある歴史的景観を良好に伝える商家町である。

表紙写真は、河港機能と関連する専棟造・妻入の町家等が並び建つ小野川沿いを望んだもので、奥に「だし」がみえる。この小野川に直交する香取街道沿いは、主に日常品を商う切妻造・平入の二階建の町家等が連なっている。また、蔵造の建築は香取街道沿いに多く、このほか大正時代以降の煉瓦造や鉄筋コンクリート造の洋風建物等も残っている。なお、小野川沿いには、日本地図作製で有名な伊能忠敬旧宅（国指定史跡）がある。

(文化財保護部建造物課文化財調査官 上野勝久)

編集後記

今回の特集「今後の日本語教育施策の推進について——日本語教育の新たな展開を目指して——」は、3月19日付けで提出された報告書「今後の日本語教育施策の推進について——日本語教育の新たな展開を目指して——」(今後の日本語教育施策の推進に関する調査研究報告)を踏まえた内容となっています。

なお、特集記事の一つになっている国際シンポジウム「国際化時代の日本語教育支援とネットワーク」(文化庁)の概要は、本報告書の提言内容の一つ「海外における日本語教育支援」に対応して、去る3月26日(金)に、国立オリンピック記念青少年総合センター(国際会議室)で開催されたシンポジウムの協議内容を元としています。

本特集では、上記協力者会議の報告書の内容や国際シンポジウムの協議内容を踏まえながら、今後の日本語教育施策の推進とネットワーク構築の在り方について追究したわけですが、今後は、こうしたニーズに対応した施策を、いかに具体的に展開していくかが問われています。(NH)

文化庁月報 5月号(通巻368号)

平成11年5月25日印刷・発行

編集—文化庁

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行—株式会社ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 編集 03(3571)2126

販売 03(5349)6666

振替口座 00190-0-161

印刷所—(株)行政学会印刷所

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、
筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円 本体514円 送料76円

年間購読料6480円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、
あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

(株)ぎょうせい営業部広告課

電話03(5349)6657 (ダイヤルイン)

©1999 Printed in Japan

ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。